

## ソキダク・ソコバ・ソコラ（その二）

我妻 多賀子

はじめに

「数量の多いこと」「および」「程度のはなはだしいこと」を表す副詞に、ココダ、ココバ、ココラがある。この三つはいずれもコが代名詞「此」、ダ・バ・ラは、量や程度に關して言う接尾語なので、自分の身近な領域、すなわちウチに属するものについて述べる点で意味・用法共に非常によく似ている。むしろ、その違いは時代的な面にあり、用例を調べた結果

ココダ ↓ ココバ ↓ ココラ

という発生の順が認められた。

そこで、右のように接尾語がダ ↓ バ ↓ ラと変わっていく例が、外にも存在するのかどうか探ってみることにし、コ系の語に続き、とりあえずソ系の語について調べてみることにした。

ところで、接尾語ダ・バ・ラの付いたソ系の語には、左のようなものがある。

ダ・・・・・・・・ソキダク  
バ・・・・・・・・ソコバ・ソコバク・ソクバク・ソコソバク  
ラ・・・・・・・・ソコラ・ソコラク

右の諸語のうち、前号ではダ・バの付く語に関して、その意味・用法をながめてみたが、その結果、ダ↓バという時代的推移を認めることは出来た。今号では、続いて、接尾語ラが付いたソコラについて調査していくことにしたい。以下、前号を承けて述べていくため、小見出しの番号も「四」から始めることにする。

#### 四 ソコラ

コ系の語の場合、接尾語ラの付いたココラには、ダの付いたココダ、バの付いたココバと比べると、全く派生語が出て来なかった。これはおそらく、ココラの用法範囲が広く、ココダやココバの派生語(例、ココダク・コキダ・ココバク・コキバクなど)が表現していた用法をココラ一語で十分に示し得ていたからだと思う。

それでは、ソ系の語であるソコラの場合はどうかというところ、やはり、派生語は少なく、わずかにソコラク一語のみが出て来た。しかも、このソコラクは、いわゆる文学作品の中では、左に記すように、『万葉集』に一字一音書きの例が一つ見えただけである。

。妹がいへらく 常世辺(とこよへ)に また帰り来て 今のこと 違はむとならば この筐(くしげ) 開くな動  
(ゆめ)と そこらくに(曾口良久尔) 堅めし言を 墨吉(すみのえ)に 還り来たりて 家見れど 家も見か  
ねて 里見れど 里も見かねて  
△九・一七四〇▽

右は「水江の浦島の子を詠む一首」の部分である。墨吉の岸に出て釣りをしていた浦島の子は、海神の女にたまたま出会って、結婚に同意し常世の国に着く。そこで、年もとらず死にもしないで長い間暮らしていた浦島の子は、ある日

自分の両親の元に帰りたいと述べる。その浦島の子の希望に対し、海神の女の答えたところが、引用箇所で、初めの「妹」は海神の女をさす。通釈すると「海神の女がいうには『この常世の国にまた帰って来て、今のように私と逢おうと思うのなら、この箱を決して開けないで下さい』と十分に堅く禁じたのに、（浦島ノ子ハ）墨吉に帰って来て家を見ようとするけれども、家を見つけないことが出来ず、里を探そうとするけれども、里も探すことが出来ず」となる。そして、いうまでもなく、この後、浦島の子は我慢できずに箱を開け、煙が出て来て、あつという間に年老いてしまったという余りにも有名な話である。

さて、ここで用いられているソコラクは、ソコラにココダク・ソコバクなどと同じ副詞語尾クが付いたもので、下の「堅めし言」に掛かっている。つまり、ソコラクはより強く念を押しして堅く禁じたいがために、用言の上に付けて、程度のはなはだしさを強調した語といえる。その点で、前号で見て来たソコバ・ソコバク・ソコバクなどと、意味・用法共に変わりはない。

ところで、このソコラクは、先に述べたように、『万葉集』以外の文学作品には、ずっと時代が下ってもまず例が見出だされない。ただ、訓点資料を見ると、『成実論』の

於ニ尔所年月

という箇所の「尔所」にソコラクノという訓がつけられている。（注一）「尔」は「爾」の俗字、熟語「爾所」は難読語として普通「爾許」と同じくソコバクと訓む。ソコラクはこのソコバクが音韻交替したものと考えられるから、「尔所」にソコラクノという訓がつけられているのは、特に問題ではない。そして、この『成実論』の点は、天長五（西暦八二八）年の訓点である。したがって、用例が少ななくて判然としたことは言えないが、先の『万葉集』の例と合わせ、少なくとも八世紀後半から九世紀にかけては、ソコラクという言い方が存在していたものと思われる。

それでは、肝腎のソコラはどんな語であったのか、その意味・用法について、引き続き見て行くことにしたい。ソコラは、上代の文献には確実な例が出て来なかった。（注二）ところが、中古に入ると、この語は、非常に頻繁に用いられるようになる。ただし、ここで、一度にいろいろな作品を取り挙げると煩雑になるので、まず初めに『源氏物語』の

ソコラについて、詳しく見ることにする。『源氏物語』では、計二十六例のソコラが出て来るが、意味的には、大きく左の二つに分けて考えることが出来る。

A 分量や数の多いさまを表す

B 程度がはなはだしい様子をいう

以下、A、Bそれぞれについて、用法なども考慮に入れて見て行くことにしよう。  
まず、Aの分量や数に關していうソコラは、左のように、形式的に格助詞ノを伴って、下の「人」を表す言葉にかかつて行くものが多い。

。そこの人のそしり、恨みをも、はばかりせ給はず

△桐壺▽

。そこのきやうさくの姫君たち、ひきこめられんは、世に物の映えあらじ

△梅枝▽

。かの御影にたちつぎたまふべき人、そこの御末々にあり難かりけり

△匂宮▽

右の例は、それぞれ「多くの人の非難や恨みをも遠慮なさらず」「多くのすぐれた姫君たちが、入内もせず、家に引き込まれてしまうのは、全く、良い娘を持つている、持ち甲斐(映え)はあるまい」「あのお姿(光源氏ノコト)をお継ぎになられるような人は大勢の(夕霧ノ子息ナド)のなかにも中々いらっしやらないのであった」と訳すことが出来、いずれもソコラは人数の多さについて述べている。

ところで、この場合はソコラの下に「人」に關する語が来ていたが、左のように、それ以外のものにかかる例も見える。

。(鬚黒ハ)御衣どもたてまつりかへなどすれど、そこの灰の鬚のわたりにもたちのぼり(体ノ)よろづの所に

満ちたる心地すれば

。そこらの行ひのしるしこそはあらめ

。そこらの御願どもみな果たし尽くし給ひつれども

△真木柱

△若菜上

△若菜下

右は順に、ソコラの使われている部分を「おびたしい灰」「多年の勤行の効験」「数多くの願ひ」と訳すことが出来る。ソコラは「人」以外の物に關し、その量の多さを述べていることになる。

以下、このようにソコラが形式的に格助詞ノを伴い、下に来る体言にかかつて、數量が多いことを示しているものをA-1とする。『源氏物語』では、このA-1の用例は計十二例を数え、ソコラ全体の半分近くを占めている。続いて、ソコラの下に、直接量の多さを表す動詞の来る例がある。

。そこら集ひ候ふ人の衣の音なひ

。そこら集ひたまへるが、我も劣らじともてなしたまへる中にも

。そこら集ひたる響きおどろおどろしきを

△賢木

△初音

△御法

右の三つがその例であるが、このソコラはすべて下に来る「集ふ」という動詞にかかつている。「集ふ」は複數のものが寄り合う意なので、ソコラは「大勢の」「多くの」の意味になる。このように、動詞に直接かかつて、數が多いことを述べているソコラを、以下A-2とする。『源氏物語』では、この種のもは、右の三例出て来るだけである。三番目に、分量が多いことを言うソコラで、A-1、A-2のどの文型にも属さないものがある。

。殿の中將の君、内の大殿の君たちそこらにすぐれて、めやすく華やかなり

。げにそこら心苦しげなることを、とりどりに見しかど

。尚侍の君の御近きゆかりそこらこそ世にひろこりたまへど

。そこらおとなしき若君達もあまたさまさまにいつれかはわろびたりつる

△初音

△真木柱

△竹河

△竹河

。御調度などはそこらしおかせたまへれば

。そこらさぶらひたまふ御方々にかかる事なくて年ごろになりけるを

△竹河▽

△竹河▽

右に挙げた文がその例になるが、これらはそれぞれ「殿の御子息の中將の君や内大臣の御若君たちが、大勢の中ですぐれて好ましくはなやいでいらっしやる」「なるほど大勢の懸想人たちの氣の毒そうな心労の数々を（玉靈八）あれこれ見てきたのだが」「尚侍の君の近しいご縁者の方は、それこそ大勢世間で威勢を張っていらっしやるけれども」「大勢の成人になられた若君達も十人十色ながら、特にどの方が見劣りするということがあるか」「御調度などは前からたくさん準備しておかれたので」「大勢おそばに仕えていらっしやる御方々にはこうしたことがなくて、何年も過ぎていたのであったから」と訳すことが出来、ソコラは「人」および「物」の数が多いことを表している。ただ、形式的には、格助詞ノを伴うとか、量の多さを示す動詞にかかつて行くなどの定まりがなく、さまざまなので、以後これらをとりまとめてA—3とする。『源氏物語』にはこの種のものが、右に記したように六例見える。

以上、Aの「分量や数の多いさまを表す」というソコラは形式上大きく二つに分かれ、用例数は合計「千一例になる」ところで、残りの五例のソコラは、左に記すように、Bの「程度がはなはだしい様子をいう」の意にとれるものである。

。京にてこそところえぬやうなりけれ、そこら遙かにいかめしう占めて造れるさま

。こなたかなたの御送りの人ども、寺々の念仏僧などそこら広き野に所もなし

。そこらところせかりし御勢のしつまりて、この君を頼もし人に思したる、常なき世なり

。風の吹き舞ふほど、広くそこら高き心地する院に

。御調度どももそこらのきよらを尽くしたまへる中にも

△若紫▽

△葵▽

△野分▽

△野分▽

△梅枝▽

これらは、それぞれ「(明石ノ入道八)京でこそ不遇のようでしたが、たいへん広大にいかめしく構えて造営している様子は」「あちらこちらからの御葬送の人々、寺々の念仏僧などで、たいへん広い野原に立錫の余地もない」「かっ

てはあんなに盛んであった(大宮ノ)ご威勢も衰えて、今はこの中将の君を頼りにしておられるというのも、転変常なてぬ世の中である」「風が吹き荒れている間、敷地が広く非常に高い建物を連ねたように思う六条院では」「御調度の品々も(源氏方)はなはだしく善美をお尽くしになられたが」と解釈することが出来、ソコラはいずれも数量の多さを言うのではなく、程度のはなはだしさについて述べている。なお、この場合の用法上の特徴は、ソコラの下に形容詞または形容動詞が来て、ソコラがそれらにかかっている点にある。

以上、『源氏物語』のソコラは、Aの1、3、そしてBの四つに分けて考えられる。では、これらの意味・用法が、他の作品ではどのように用いられているのか、例を挙げながら順に見て行くことにしたい。

最初にA-1の「ソコラ+ノ+体言」という形のもは、『源氏物語』以外の作品にも数多く見え、しかもその体言が「人」又はそれに準ずるものである場合が多い。

。それが玉を取らむとて、そこらの人々の害せられなむとしけり

△竹取物語▽

。そこらのあそび人どもにます人なく遊ぶ

△宇津保物語・嵯峨院▽

。そこらの人のあぎとふやうにすれば、さすがにいとせんかたなくをかく見ゆ

△蜻蛉日記・中・天禄二年七月▽

。そこらの人のほめ感じて「せうとこち来、これ聞け」とのたまひしかば

△枕草子・二八二▽

。御前の物とりいるとてそこらの上達部・殿上人にさしいでて

△紫式部日記▽

。そこらの女房・上下泣きあへり

△狭衣物語・二▽

。別当僧都を始めそこらの七大寺の僧どもひきて喜び申したる程

△栄花物語・一六▽

。そこらの人多かりしかど、ものはかばかしく耳とどむるもあらめど

△大鏡・序▽

。相模の守をはじめそこらの武士ども並みたるけしきさまかはりて

△増鏡・一一▽

。八百よろづそこらの神のとしなみに夜ひるまもる君が御代かな

△新続古今集・二〇・二二一五▽

なお、A-1の中には、ソコラノのかかって行く体言が、左のように「人」以外の場合もある。

- 。汝が助けにとて、かた時のほどとて下ししを、そこらの年頃、そこらの金給ひて
- 。御簾のうちにそこらの御目どもの中に宮の御前の見苦しと御覽せむばかり
- 。そこらの月比を経て、わづらひ給へる人のかばかり思ひ入りまとはんに
- 。そこらの年をへて弾きしみたるよりも、いまめかしくすみたる音をひきまし給へるに
- 。そこらの御祈りのしるしにや、このころは少しよろしくなり給つるやうにて
- 。そこらの御願のしるしにや、仏神の御しるしのあらはるべきにや
- 。そこらの御修法の壇どもはち、僧どもの物運びのしる程
- 。そこらの御衣どもは、いかかもたげさせ給はんずる
- 。夜のうちにこの北野にそこらの松をおほしたまひて
- 。そこらの橘さながら同じ様になむありける
- 。七八のひさごより、そこらの毒虫ども出でて、子どもをも刺しくひ
- 。この大覚寺にそこらの御庄・御牧などを寄せ置かる

- △竹取物語▽
- △枕草子・二七八▽
- △浜松中納言物語・五▽
- △夜の寢覺・一▽
- △夜の寢覺・一▽
- △栄花物語・七▽
- △栄花物語・九▽
- △栄花物語・二四▽
- △大鏡・時平▽
- △兎心集・八ノ八▽
- △宇治拾遺物語・三ノ一六▽
- △増鏡・一四▽

次に、ソコラが数が多いことを示す動詞にかかつて行くA—2の例には、左のようなものがある。『源氏物語』ではもつばら下に来る動詞が「集ふ」のみであったが、他の作品では、「集ふ」と同じように、数の多さを表す動詞として「集まる」「満つ」「込む」なども使われている。

- 。そこらつどひたる大臣・公卿
- 。そこらみちたる僧俗上下、知るも知らぬもなく
- 。そこら参り込み給へる上達部・山の座主・権僧正めいそん
- 。他ノ犬其(ソコラ)集リキタリテクヒ合ヒノシリケレバ
- 。一條の大路にそこらあつまりたる人
- 。院方にそこらつどひたるものども、ひとつごころにめをかためまもりまもりて

- △浜松中納言物語・一▽
- △栄花物語・二六▽
- △栄花物語・二七▽
- △今昔物語集・一九ノ三▽
- △大鏡・師輔▽
- △大鏡・道隆▽



。そこらつとどひたる者ども、諸声に笑ふ

△宇治拾遺物語・一ノ六▽

。そこらあつまりたる大衆、異口同音にあめきて

△宇治拾遺物語・五ノ一一▽

。そこらつとどひ集まれる者ども、ただあきれたるよりほかの事なし

△増鏡・二▽

。付き従ふ者そこら満ち広がりて

△増鏡・一七▽

続いて、数量の多さを言うことに変わりはないが、形式的にはA-1、A-2のどれにも属さない、いわゆるA-3の例には、左のようなものがある。

。人のそこらたてまつるなづき(名簿ノコト)をとどめさせたまひて

△宇津保物語・藤原の君▽

。そこら興ありつる事よりも、これこそめでたけれ

△宇津保物語・蔵關上▽

。月ころそこらさぶらひつる殿のうちの僧をば、さらにもいはず

△紫式部日記▽

。思ひ出よそこらちぎりしの葉をいかに忘れてそむきぬる世ぞ

△浜松中納言物語・二▽

。ともの人々浄衣姿なるを、そこら(多クノ人々ガ)棧敷にうつるとて

△更級日記▽

。そこらいししと(次々ト)聞ゆる人々、御答へはなくて

△狭衣物語・一▽

。月頃、との内にそこらさぶらひつる僧は更なり、いはず

△栄花物語・八▽

。この世界の厄ども心を尽くして参り送り奉れど、そこらある人なれば(人ガ大勢集マツタコトダカラ)、いづれ

△栄花物語・三〇▽

とも知りがたし

△栄花物語・三〇▽

。そこらさぶらひつるものども、くものこを風のふきはらふごとくにげぬれば

△大鏡・伊尹▽

。そこら立ち止まりて見ける者ども

△宇治拾遺物語・一ノ一五▽

。かりおけるつかねのあるのそこらあればあくまでそめる色ぞしらるる

△新撰六帖・六・二一六三▽

。もろびとのそこらいのりしるしあらばやそちを君につたへざらめや

△万代和歌集・二〇・三七九四▽

。くるあまのそこらかりおくみるめをばいづくにつまんくらなしのはま

△夫木和歌抄・二五・一一八〇九▽

。そこら参りしつは物どももまかつればかひしめりのどやかになりぬる、いとど心細し

△増鏡・一六▽

。この春、君の宮へ別れ給ひしに、そこら尽きぬと思ひし涙もげに残りありけりと

△増鏡・一六▽

右の十五例がA—3に含めて考えられるソコラの例であるが、うち半分以上が「人」について、その数の多さを述べている。また、これらは、用法的に下に来る「さぶらふ」「うつる」「あり」「参る」「見る」などの動詞にかかっている点でよく似ている。「人」以外に数の多さを言う例には、「提出した名簿」(『宇津保』)、「興味を持ったこと」から「(『宇津保』)」、「約束した言葉」(『浜松』)、「束ねた藍」(『新撰六帖』)、「祈った効験」(『万代和歌集』)、「刈った海松布」(『夫木和歌抄』)、「流した涙」(『増鏡』)の七つがあるが、これらもすべて、人間がみずから、あるいは手ずから行ったことばかりで、「人」との関連性が濃く認められる。(注3)

以上、数量の多さを言うAのソコラについて調べてみたところ、形式上、その用例は、先に『源氏物語』のところで述べたように、三つに分けられ、その他のものは出て来なかった。

次に、Bの、程度がはなはだしいことを示すソコラの、『源氏物語』以外の例としては、左の八つが見られた。

。そこらあまたにわかるる御心に、やがてひとつにおしまろがしつるやうに覚ゆるままに △浜松中納言物語・五▽

。そこら多かる宮の中の人々 △狭衣物語・二▽

。そこら広き殿の内なる僧俗・十下 △栄花物語・八▽

。そこら広き庭に人と見え給はで △栄花物語・二〇▽

。そこら広き殿の内ひまもなし △栄花物語・二六▽

。顔はそこらけさうじたりつれど、くさの葉の色のやうにて △大鏡・藤氏物語▽

。かくさまざまにめでたき事ども、そこらおほく見聞きはべれど △大鏡・藤氏物語▽

。そこらさはかり尋ねもとむるに、見聞きつけぬやうあらじ △とりかへばや物語・中▽

右の諸例は、意味・用法の上から大きく二つのグループに分けて考えられる。

一つは、ソコラが、下に来る形容詞、もしくは形容動詞にかかって行くもので、『栄花物語』の三例と『大鏡』の初

めの方の例がそれに当たると。『栄花物語』の例はいずれもよく似ていて、下に来る形容詞の連体形「広き」を修飾し、「さしも広大な」の意味を表している。『大鏡』の例は「顔は精一杯化粧していたが」の意になり、下には形容詞や形容動詞が来ているわけではないが、それに準じて考えられる、状態を表す文章が使われている。なお、このように、ソコラが、下に来る形容詞・形容動詞、あるいはそれに類する語句にかかって、「はなはだしく」の意味で強調表現をしている用法は、すでに『源氏物語』に見られたものである。

もう一つ、程度の激しさを言うソコラの用法として、その下に、分量の多いことを示す言葉が用いられているグループがある。右の中では、ソコラの下に「あまた」（『浜松』）、「多かる」（『狭衣』）、「おほく」（『大鏡』）の二番目の例、「さばかり」（『とりかへばや』）の各語が使われている四例が、これに該当する。この場合、ソコラ自体をAの数量の多い意にとると、下の「あまた」などの語と重複してしまうので、やはりここは、Bの程度のはなはだしさを言う意味にとるべきであろう。

以上、『源氏物語』を除くBのソコラの例は、私の調べた限り、右に挙げたものだけで、用例数から言うと、きわめて少なかった。

さて、これまで、副詞ソコラについて意味別に述べて来たが、ここで、主要作品におけるソコラの用例数を一覧表にして示し、全体をまとめてから、章を改めて、ソコバ・ソコタとの関連性について言及することにした。(注4)表は一番上に作者名を成立年代順に並べ、その下に四つの意味・用法別に用例数を示し、最下段に合計数を掲げた。なお、四つの意味・用法は、すでに述べて来たとおり、左のような分類による。

A1.....数量の多さについて言う。下に格助詞のノを伴って用いられる。↓ソコラ+格助詞ノ+体言

A2.....〃〃下に数が多いことを言う動詞を伴う。↓ソコラ+ソッドフ(集)・アツ

マル(集)・ミツ(滴)・コム(込)など

A3.....〃

右以外の例。下に来る動詞にかかる。↓ソコラ+サブラフ(候)・マ

キル(参)・ナガス(流)他

B・・・程度の激しいことを言う。下に形容詞・形容動詞もしくは状態を表す言葉、さらには、分量や数の多いことを言い表す語を伴う。↓ソコラ+ヒロシ(広)・ハルカナ

リ(遥)・アマタ(数多)・オホシ(多)など

作品名	竹取物語	蜻蛉日記	宇津保物語	枕草子	源氏物語	紫式部日記	浜松中納言物語
A 1	四	一	一〇	三	二二	二	二
A 2					三		一
A 3			二		六	一	一
B					五		一
計	四	一	一二	三	二六	三	五

宇治拾遺物語	発心集	とりかへばや物語	古本説話集	大鏡	今昔物語集	栄花物語	狭衣物語	更級日記	夜の寢覚
一	一		一	三		三五	一		三
三			一	三	一	六			
一				一		二	一	一	
		一		二		三	一		
五	一	一	二	九	一	四六	三	一	三

新 統 古 今 和 歌 集	増 鏡	夫 木 和 歌 抄	万 代 和 歌 集	新 撰 和 歌 六 帖	東 関 紀 行	十 訓 抄
一	五				一	一
	二					
	二	一	一	一		
一	九	一	一	一	一	一

右の表で明らかかなように、ソコラは中古以降、ジャンルに関係なくよく用いられている語である。意味的にはAの数量の多さを述べる例が圧倒的に多く、程度のはなはだしさを言うBのソコラはそれ程用いられていない。そして、Aの用法を見ると、ソコラの下に格助詞のノと体言が来るA1の用例数が断然多い。すなわち、右に掲げた二十四作品中、三分の一に当たる八作品では、ソコラの例のすべてが、A1の形で出て来ている。総数から言っても、A1は計八十七例で、これは全用例数の六十七パーセント以上になる。これに対して、A2とA3は、ほぼ同数の二十例前後使われ、百分率にすると、共に十四パーセント程度にしかならない。Bに至っては、さらに少なくて、合計が

十三例、これは全体の十パーセントにも満たない。もちろん、あらゆる文献に目を通してあるわけではないので、数字はあくまでも目安に過ぎないが、ソコラのおおよその使い方は、これで判断できると思う。

以上、ソコラの意味・用法について通時的に考察をして来たので、続いて前号で書き記したソコダ・ソコバとの関係を見ながら、全体をまとめることにしたい。

## 五 まとめ

前にも記したように、接尾語ダのついたソ系の語ソキダクは、『万葉集』にのみ見えるので、バのついたソコバ、ソコバク、ソクバクなどに比べ、時代的に古い語であったことは確かである。

では、ラのついたソコラク、ソコラとソコバなどの関係はどうであろうか。ソコバは、先に述べたように、『万葉集』に一字一音書きの例が見えるところから、上代ですでに存していた語である。そして、ソコラについては中古に入ってからその例が多く見え始めるが、ただ、『万葉集』には一字一音書きのソコラクが使われていること、『日本書紀』に古訓が見えることなどから推測すると、上代にソコラが存在していた可能性は大きい。したがって、ソコバとソコラは、はたしてどちらが先に生じた語であるか断定することは難しい。

次に、これらが時代的にいつまで用いられているかを辿ってみると、まず、ソコラは先に述べたように、上代でこそその確実な例が出て来ないが、中古以降は、ジャンルに関係なくよく用いられている。一方、ソコバは上代では一字一音書きの例があったのにもかかわらず、中古の初めには消滅してしまう。そして、以後は、ソコバもしくはソクバクの形で使われるようになる。そこで、ソコラとの比較は、ソコバではなく、ソコ(ク)バクに注目して調べてみると、両語とも、時代的には近世まで使われ、意味・用法上の差はほとんど見られない。むしろ、その違いは使用ジャンルに認められる。すなわち、ソコラはどちらかというところ、和文系の作品に数多く見える。例えば、『源氏物語』では、ソコバク一例に対して、ソコラは二十六例、『大鏡』では、ソコバク三例に対して、ソコラは九例と、いずれもソコラの方が多く使われている。さらに、『蜻蛉日記』『枕草子』『紫式部日記』『栄花物語』『増鏡』などの作品では、ソコバクは全く出て来ず、もっぱらソコラのみが用いられている。また、和歌を見ると、ソコラはまずまずの用例が出て来る

が、ソコバクは、きわめて少ない。

一方、このソコラに対し、ソコバクは漢文訓読系の作品に多く見える。例えば、『今昔物語集』を見ると、ソコラ一例に対し、ソコバクは五十二例も使われている。また、『三宝経詞』『沙石集』『太平記』などでは、ソコバクのみが使われ、ソコラは全滅使用されていない。

以上のことから推察すると、ソコバに副詞語尾がついて出来たソコバクは、元々漢文訓読語として使われ始めたものではなかったかと思われる。実際、訓点資料をひもといてみると、ソコラは既述のように、『日本書紀』の古訓にこそいくつも見られたが、そのあとは例が出て来ない。したがって、同義の語として用いられたソコラとソコバクは、時代的な相違というより、むしろ一方が和文系の作品で、もう一方は漢文訓読系の作品でというジャンルによる使い分けが基本的には存していたのではないかと推測される。そこで、コ系の場合にはココダ↓ココバ↓ココラという発生順を辿ることが出来たが、ソ系の場合にはソコダこそ古い形として認められても、ソコバ、ソコラについては、どちらが先に使われるようになったかを見きわめことは、まず困難と言っているのではないだろうか。

なお、ココダ・ココバ・ココラなどのコ系の語とソコバク・ソコラなどのソ系の語を比べてみた場合、意味・用法上どのような使い分けが見られるかについては、改めて調査して別に記すことにし、今回はこの辺でひとまず筆をおくことにしたい。

注1 『仮名遣及仮名字体沿革史料』 大矢透 昭和四十四年九月 勉誠社

注2 『日本書紀』の古訓に左のようなソコラが数例見える。

。言を興(あ)げて此を念ふに、唯以て恨をのみ留む。今、年(とし)若干(そこら)に隲(こ)えぬ。

△雄略紀・二十三年八月V



この種のはソコバクと訓んだ場合もあり、一字一音書きの確実な例とは言えないので、今回は対象からはずすことにした。

注3 『宇津保物語』に次のような例がある。

。さるうすもの御直衣にそこらつつまれたれば、残るところなく見ゆる時に

△初秋▽

右の主語は蟹で、「それが沢山うすい生地の直衣の袖に包まれているので（尚侍ノ姿ガ）すっかり見える時に」とする解釈がある。ただこの部分は異本が多く、本文がはつきりしない。人以外の動植物にソコラを使う例は、これまで見てきたように非常に少ないので、ここは「御直衣にぞただつつまれたれば」とする流布本の見解の方が無難かもしれない。いずれにしろ、本文不明瞭につき、この部分はとりあえず用例から削除する。

注4 今回の調査に際して参照とした底本は左に記すものを除いて、岩波書店発行の旧日本古典文学大系本である。

なお、歌は『国歌大観』によった。

- 。三宝檢詞……『三宝檢詞自立語索引』 馬淵和夫 昭和六十年 笠間書院
- 。古本説話集……『古本説話集総索引』 山内洋一郎 昭和四十四年 風間書房
- 。とりかへばや物語……『とりかへばや物語総索引』 鈴木弘道 昭和五十二年 笠間書院
- 。発心集……『発心集 本文・自立語索引』 高尾 稔 長嶋正久 昭和六十年 清文堂
- 。東関紀行……『東関紀行 本文及び総索引』 江口正弘 昭和五十二年 笠間書院
- 。十訓抄……『十訓抄 本文と索引』 泉 基博 昭和五十七年 笠間書院
- 。太平記……『十井本太平記 本文及び語彙索引』 西端幸雄、志甫由和恵 1997年 勉誠社